







論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	渡辺 奈津
論文担当者	主査  
	副査  
	副査  
学位論文名	Effects of ku-oketsu and seinetsu Kampo medicines on
	rosacea-like skin symptoms induced by steroid in mice
	(ステロイドにより誘発した酒さ様皮膚炎マウスにおける漢方薬、
	駆お血剤、清熱剤の効能)
論文審査の結果の要旨	
<p>酒さは顔面の持続的な紅潮を主症状とする難治性皮膚疾患で、国内外のガイドラインで提示される治療法はいずれも効果に乏しいが、漢方薬処方後に酒さ様症状が改善した例が多く経験される。漢方処方の酒さ様症状に対する効能の機序を検討するため、マウスモデルを用いて検証実験を行った。</p> <p>実験にはオスのヘアレスマウスを使用し、ステロイド外用薬(クロベタゾールプロピオネート軟膏)を背部に1日2gを10日間塗布して酒さ様皮膚炎モデルを作成した後28日間、清熱剤である十味敗毒湯(以後JHT)3%単独、駆お血剤である桂枝茯苓丸加ヨクイニン(以後KBY)2.5%単独、または3%JHT+2.5%KBY混合を含む餌を与え、この間、血流速度スコープにて背部皮膚における血流速度と紫斑面積の変化を測定し、漢方無し群、無処置コントロール群と比較した。その結果、血流速度はステロイド塗布期間中低下し続けたが、JHT単独群、JHT+KBY群では次第に回復し、実験37日目にはコントロール群と同レベルに回復したのに対し、漢方無し群の血流速度は回復せず、コントロール群よりも有意に低かった。また紫斑面積はステロイド塗布期間中増加し続け、漢方含有餌摂取開始後に減少傾向を示したが、JHT+KBY群ではコントロール群と同レベルに回復したのに対してJHT単独群では回復度合いが少なかった。また、背部の皮膚を採取し病理組織像を比較した結果では、ステロイド塗布により実験9日目には有棘層が減少、消失し表皮の菲薄化が著明であったが、JHT+KBY群では実験37日目に正常な皮膚組織に回復していた。さらに、実験37日目に糞便を採取し、メタボローム解析を行った結果、JHT+KBY群では漢方無し群と比較すると、スペルミン、ハイドロシキブロリン、アスパラギンの増加が観察された一方、リンゴ酸、ウラシルの減少が見られた。</p> <p>以上の結果から、ステロイド酒さというモデルの限界があるものの、清熱剤と駆お血剤が相加的に酒さ様皮膚炎を改善することが実験的に示され、その機序の一端が示されたといえ、臨床的意義は大きい。以上の理由により、本研究は学位授与に値するものと判断する。</p>	